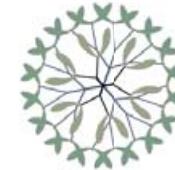
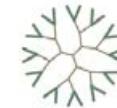


東京都薬用植物園 <薬草教室>



「和服文様における植物の話」

～文様が語る文化～



きものアトリエ とりよろふ

<http://www.toriyorofu.jp>



自己紹介



- ・ きものアトリエ とりよろふ

◆加藤寛司（かとうかんじ） ◆加藤優佳（かとうゆうか）

- 1985年 筑波大学芸術専門学群絵画コース卒業
1986年 一竹工房に入社
2008年 独立し、きものアトリエ‘とりよろふ’を開く
2009年 12月 万葉の花ごろも展開催（銀座 清月堂）
2010年 9月 2010万葉の花ごろも展開催（奈良県立万葉文化館）

- 師である染色家・久保田一竹の工房で20年以上染色にたずさわる。色を複雑に重ね暈かすことにより手描友禅に独特の世界を表現する新たなスタイルを確立。開業後、万葉の世界に興味を抱き、そこに詠まれている植物をテーマにしたきものの制作を始める。現在は、実生活でのパートナーであり、同じく30年以上の染色キャリアをもつ加藤優佳（かとう ゆうか）と共に、個性をぶつけ合いながら、更なる進化を目指し制作に取り組んでいる。

- 作品、イベントに関するお問い合わせは

Tel : 080-5081-8079





「とりよろふ」について



◆とりよろふ…とは？

万葉集に出てくる、日本の古いことば

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香久山

登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は
かまめ立ち立つ うまし国ぞ 秋津島 大和の国は

舒明天皇 国見の歌（巻1-2）

（大和にはたくさんの山があるが、とりわけ立派にととのっている天の香具山に登って国を見渡せば、国原からあちらこちらから煙が立ち上がり、海原からは鷗が飛び立っている。本当に良い国だ、秋津島の大和の国は）

「ととのいそなわる」「とりわけてよい」などの説

※日本の文献にはほかに使われる例がないため**意味不詳**の言葉





「万葉集」について



万 = よろず

葉 = 言の葉・世、代
集

- 多くの言の葉（歌）を集めたもの
- 万世にまで末永く伝えられるべき歌集

- 日本最古の歌集 20巻（4516首）
- 舒明天皇から淳仁天皇までの約130年間
- 天皇・皇族・高官・下級官人・兵士（防人）・農民・老若男女





万葉に登場する植物について



- 全**4516首**の中の**約1500首 (1/3)** に植物が詠まれて
いる
 - 生活の中で万葉人と植物との関わりが大変大きかった
- 分類すると**約150種類**の植物が登場する
- 現代と同じ呼び名の植物もあるが、万葉植物名（万葉古名）
で呼ばれる植物もある
- まだ特定できていない万葉植物もある





文様の中の植物たち～きものについて①

- きもの（着物）は元来「着る物」の意。長く「小袖」と呼ばれてきたが、江戸から明治に移り、洋服が移入して以降、「西洋服」と区別して、従来の日本の衣服を「日本服」「和服」と呼ぶようになり、さらには「着物（きもの）」の語に置き換えられるようになった。

※ 小袖

平安時代後期までは公家たち上層の人々の下着として、また庶民の実用着・労働着として用いられてきたが、近世になると男女とも衣服形式の中心となつた。



文様の中の植物たち～きものについて②



● 小袖の意匠様式

洋服がシルエットの変化によって、その時代時代の流行がつくられてきたのに対し、小袖は、形態自体が大きく変化することはなかったが、文様の変化、および、その技法によって流行を生んできた。このように文様がモードの核心となっている小袖は、世界各地の衣服との比較してみると、大変稀有な、際だった装飾様式といえる。





文様の中の植物たち～きものについて③

◆ 際立つ特性の要因

- 直線裁断による上下一部式の衣服



- 大きなスペースを持つ



- 多様な装飾デザインが表現可能

- 身につければ各人各様の形ができあがる
- 人に着られることを前提としながらも、衣桁にかけば平面的な一幅の絵画のように観賞することもできる
- 宮崎友禅の考案で友禅染が始まる



- 文様に様々な意味を込めたり、思いを託したりする趣向を生みだした



文様の中の植物たち～きものについて④



● 宮崎友禅

知恩院の門前町の扇絵師

独自の意匠と、在来の染織技術を工夫改良して
友禅染を完成させ、『友禅ひいなかた』などの
絵柄集（ファッショングザインブック）を出版
し人気を博した

扇絵の古歌・故事をふまえた内容ある表現の面
白さが小袖の意匠に生かされた

友禅の絵は、通人に喜ばれるような、ある種の
“絵遊び”があり、絵の奥に意味が隠された粋な
ものだった

扇絵師らしい、非常に優れた構図を持っていた



文様の中の植物たち



①吉祥の植物たち

- 長寿や延命を祝うもの
- 幸福を祈るもの
- 富貴を願うもの

松竹梅

桐竹鳳凰

橘





①吉祥の植物たち－松竹梅





①吉祥の植物たち－松竹梅

- 「松竹梅」は室町時代初期に中国から伝わった
「歳寒三友」による文様
- 歳寒三友
 - 宋代より始まった、中国の文人画で好まれる画題のひとつ
 - 厳寒にあっても緑を絶やさない松、寒中でもまっすぐに伸びる竹、早春に花を咲かせる梅
 - 「艶美的なものに触れることのない清廉潔白の風趣」「酷寒を耐え忍ぶ清雅な営み」といった文人が願う理想の実践生活態度に合致するため尊ばれる
 - これは吉祥招福を願う世俗的なものとは相容れないため、どのような経緯で「歳寒三友＝吉祥」となったかは不明

※ 宋代：10～13世紀

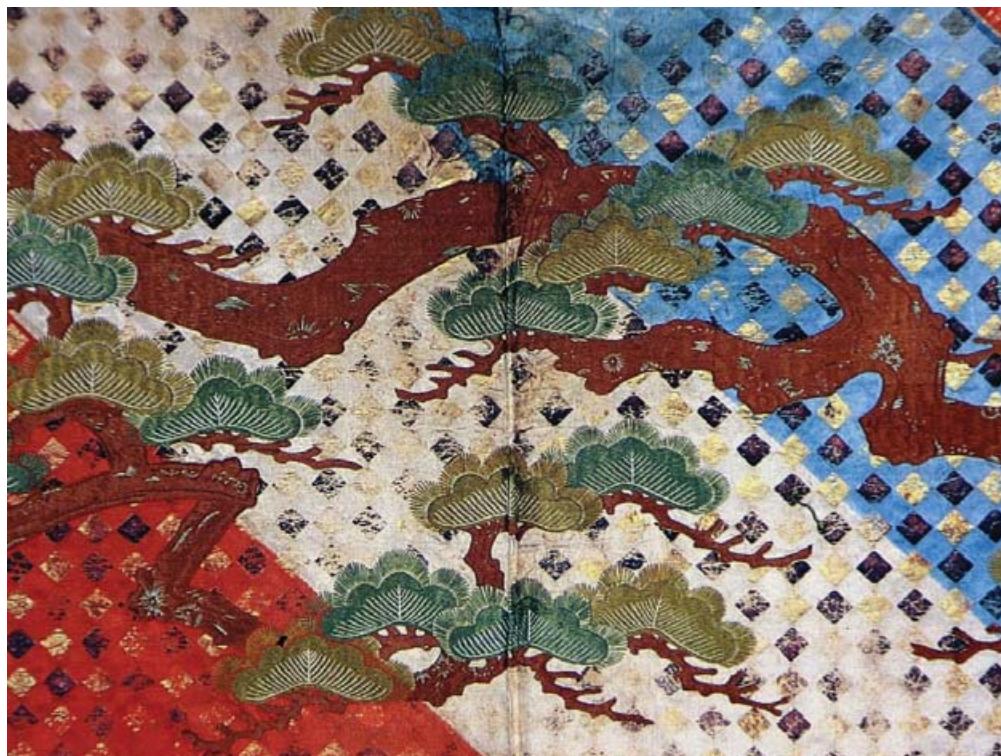
※ 文人画とは職業画家の画に対し文人（文芸を志すもの）が余技（専門とは別に身につけた技芸）として描いた絵画。画家の内面性・精神性が評価される



①吉祥の植物たち－松竹梅



松



● 常盤木

- 冬の厳しい寒さの中でも凛として緑をたたえる常緑の松は**長寿の象徴**
- 古くから「松は神の天降りを待つ」**神聖で、めでたい木**とされる。神の依代（よりしろ）
- 門松、小松引き（平安）
- 能の舞台に描かれる高尚な木



①吉祥の植物たち－松竹梅



竹



- 寒中でも風雪に耐え、まっすぐになんやかに伸びる竹
- 中空で、節がある→節操（正しいと信じるもの堅く守る）高く廉潔（心が清く私欲がなくて行いが正しい）
- 成長が速く、真っ直ぐに伸び、地下茎の繁殖力の強い常緑の竹は**長寿と子孫繁栄**の象徴
- 門松にも使われる
- かぐや姫と竹



旺盛な成長力と清楚な美しさ
が重なり合う



①吉祥の植物たち－松竹梅



梅



- 寒さ厳しい冬に百花にさきがけて香り高く咲く
- 清香にして文雅（さわやかな香りで上品）
- 「学問に励むと梅が咲く」という故事・好文木（こうぶんぼく）の影響で、貴族に好まれた
- 旧正月のころ開花する（2018年は2月16日）



①吉祥の植物たち－桐竹鳳凰





①吉祥の植物たち－桐竹鳳凰



- 吉祥高貴の文様
- 天皇の御袍の文（平安時代初期ごろから）
- 泰平の世を治めた君主を褒め、天上から鳳凰が舞い降りてくる
- 凤凰は鳥類の最高位にあり、あらゆる鳥を従える。地上の梧桐にのみ集まり、六十年に一度稔る竹の実を食して現世に栖まうとする。しかし、乱世と共にたちまち天上へ還るとされ、善君の世の証しとして天皇の袍に織り表されてきた

※ 小袖やきものの文様としては桐に鳳凰の組み合わせが一般的

※ 文様化されている桐（ゴマノハグサ科）は本来の悟桐（アオギリ・アオギリ科）とは異種であり、わが国で取り違えたものと思われる



①吉祥の植物たち－桐竹鳳凰



桐の花



五七桐

- 桐の木は成長が早いことから、昔は女の子が生まれると桐の苗を植えて、その子が嫁入りするときの篭笥の材とした
- 伐るとすぐ芽を出し成長する**生命力**を持つ。桐は「切り」がその語源という。
- 桐紋(五七桐)は菊とともに皇室専用のものだった
- 足利尊氏や豊臣秀吉も桐紋を天皇から下賜され、「政権担当者の紋章」として定着
- 現在の日本政府の紋章(五七桐)
- 5～6月に紫色の花を咲かせる桐だが、意匠としての桐文は、鳳凰と組み合わせれば吉祥文として、桐だけであってもある種の格とめてたさを表象して、季節に関わりなく用いられる



①吉祥の植物たち－橘





①吉祥の植物たち－橘



- 橘は常緑樹で、香の高い五弁の白い花が初夏に咲く。
- 旧暦五月は橘月とも呼ばれ、人々はこの花を見て農事を開始した。
- 御所の紫宸殿前にある「左近の桜」「右近の橘」平安時代に左近衛府、右近衛府の官人が、それぞれそれらの木から南に陣列





①吉祥の植物たち－橘



万葉集

橘は 実さへ花さへ その葉さへ

枝に霜降れど いや常葉の樹

聖武天皇（巻6-1009）

橘は実までも花までも輝き、その葉まで枝に霜が降りて
もますます常緑である樹よ

※実も花も葉も観賞の対象だった





①吉祥の植物たち－橘



『枕草子』「木の花は」の段

「四月のつごもり、五月のついたちの頃ほひ、橘の葉のこくあおきに、花のいとしろう咲きたるが、雨うちふりたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし、花のなかよりこがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたるあさぼらけの桜におとらず、ほととぎすのよすがとさえおもえばにや、なほさらいふべうにもあらず……」

四月の下旬や五月の上旬の時分、橘の葉が濃く青いときに、花がとても白く咲いているのが、雨が降った日の翌朝などは、またとなく趣のある様子で心ひかれる。花の中から(顔を出す実が)黄金の玉かのように思われて、とてもあざやかに見えている様子などは、朝露に濡れている明け方の桜にもひけをとらない。ほととぎすが身を寄せる所とまで思うからだろうか、やはりまったく言いようがない(ほど素晴らしい)

※ 常に変らぬ縁と香り高い白い花、黄金の玉かとみえる丸い黄橙色の果実に人々は心ひかれてきた

※ 古代人の夢みた長寿と幸福の理想国、常世国の象徴→常世花





文様の中の植物たち



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物

杜若

浜松

夕顔

葵

菊水

木賊に兎

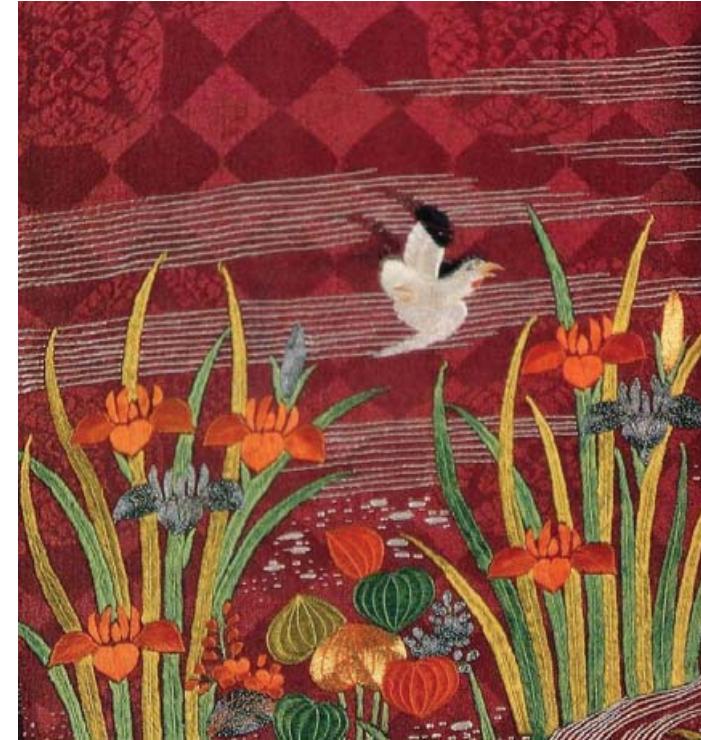
牡丹に獅子

群を抜く！
伊勢物語
源氏物語
の人気！





②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－杜若



- 八つ橋の表現は見られないが、「伊勢物語」業平東下りの物語に依拠している
- 燕を各所に配して、杜若（燕子花）を暗示



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－杜若



- 杜若に縷(おいかけ※)を配した図様。在五中将と称された在原業平を象徴する。
- 八つ橋の代わりに業平菱を配している

※ 武官の正装用の冠の左右につける飾り。馬の尾の毛で編み、もとを束ね半月形にひらいたもの



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－杜若



「伊勢物語」（第九段-業平東下り）

都にて身分の異なる女性に恋し、破れた男が仲間とともに新天地を求めて東国へ下る旅の途中で、三河の国にある八橋の沢を通ると杜若が咲き誇るようにいたるところで花を広げていた。

男は、その美しい光景を目にして、旅愁にかられ、遠く離れた都を懐かしみ、

唐衣 着つつなれにし 妻しあれば
はるばる来ぬる 旅をしづ思ふ

何度も着て身になじんだ唐衣のように、長年なれ親しんだ妻が都にいるので、その妻を残したままはるばる来てしまった旅のわびしさを、しみじみと思うことです
と詠う。



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－杜若

か 唐衣
き 着つつなれにし
つ 妻しあれば
ば はるばる来ぬる
た 旅をしそ思ふ

杜若が咲く美しい情景があったからこそつくられたこの和歌は、
「伊勢物語」の中でもとくに人気が高く、古代の人々は、杜若といえども「伊勢物語」の八橋の場面を連想した。
そのためか、着物や帯の意匠となる杜若文様には、「伊勢物語」の八橋の場面をあらわしたものが多くつくられている。



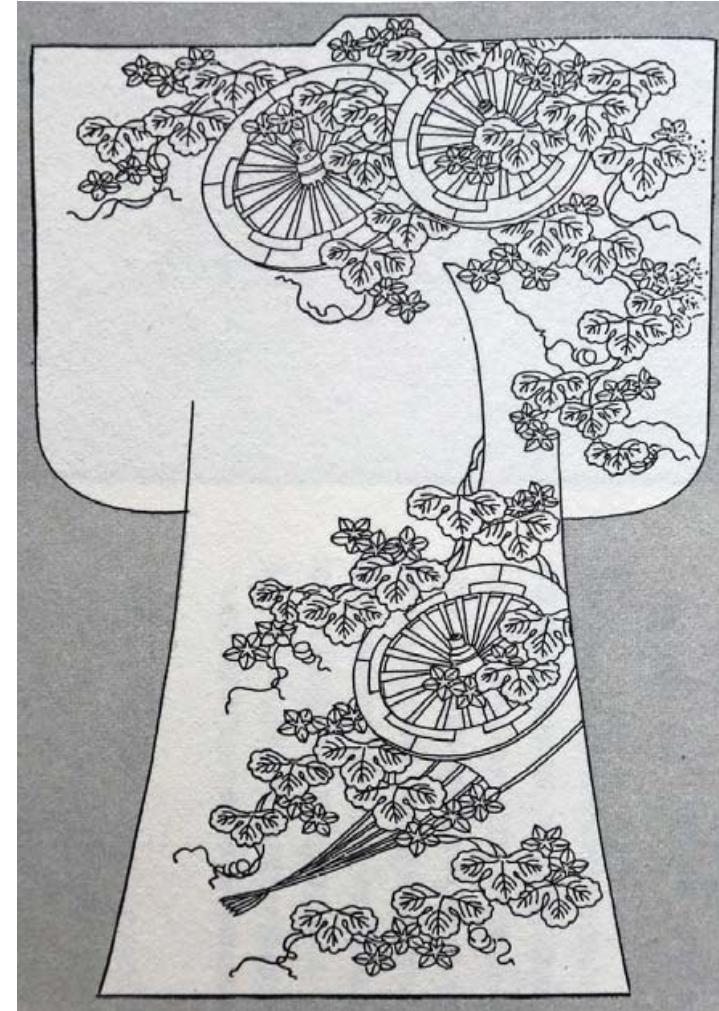
②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－杜若



- 江戸時代に活躍した尾形光琳が「伊勢物語」の場面をあらわした「燕子花（かきつばた）図屏風」を手がけたことで、杜若と伊勢物語は一体で語られることが多くなった



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－夕顔



車に夕顔「太平ひいなかた」元禄九年(1696)刊



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－夕顔



- 腰上の檜扇と夕顔は『源氏物語』の「夕顔」の巻を象徴
- 裾の若松と梅花は吉祥を表すモチーフ
- 決して縁起の良い末路とはいえないストーリーを、梅松で打ち消し、和らげる意図か



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－夕顔

『源氏物語』 第4帖「夕顔」

光源氏は乳母(めのと)※の病気見舞いの折、その家の隣に住む女性と出会う。その家の庭には夕顔の花が咲いていた。源氏は可憐で素直な夕顔に安らぎを覚え、深く愛し夢中になるが、彼女は物の怪に襲われて急死してしまう。深く嘆き悲しむ源氏…

- 夕顔は夕闇の中にわびしくたたずむように白い清楚な花を開き、朝方にははかなくしほんでしまう。その花の姿がものあわれを象徴しているようで、物語の夕顔のイメージに重なる
- 源氏物語の人気は突出しており、各帖をモチーフとした意匠の小袖は多い

※母親代わりに育ってくれた人



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－菊水





②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－菊水



菊と水の組み合わせは中国の故事に由来する

中国周(紀元前1100～前256)の穆王(ぼくおう)の時代

穆王の寵愛していた慈童という童子が、ある日誤って帝の枕の上を越えたとがによって、深山に流されたが、穆王はそれを哀れみ、普門品(フモンボン、観音経)にある二句を毎朝唱えるよう仰せられた。慈童は毎朝この文を唱えたが、万一忘れるようなことがあってはと、菊の下葉にこの文を書きつけたところ、この菊の葉の下露が谷の水に滴り落ち、その水はみな天の靈薬となつた。これを飲んだ慈童は仙人となつたばかりか、谷の水を飲んだ民三百余家の人達は不老不死の上寿を保つにいたつた。その後八百年たつたが、慈童は少年の体で老衰の様子は見えなかつた。魏の文帝の時、彭祖(ほうそ)と名を変え、この靈水を文帝に捧げた。文帝はこれを受けて菊花の盃を伝え、万年の祝をされた。重陽の宴はこれから始まつたといふ。

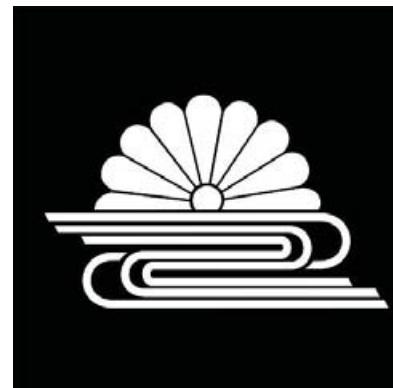
物語として伝えられてきた説話を基に創作されたのが、能の『菊慈童』(『枕慈童』)で、それから考案されたのが流水と菊花とを組み合わせた菊水の文様である。



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－菊水



菊の花



菊水紋

- 奈良時代に薬草※として中国から伝えられたとされる

- 平安時代には観賞花となる

- 重陽の節供※

- 日本でも平安時代からは宮中で九月九日に重陽の節会が催され、菊酒（菊の花びらを浮かべた酒、菊花酒）を飲むことが定着。
- 前夜、菊の花に綿をかぶせ（菊の着せ綿）、九日の朝、露を含み菊花の香り漂うその綿で肌を拭い長寿を願う
- 邪気を払い、長寿を願って菊花を飾る

- 菊水紋 → 楠木正成の家紋

※中国最古の薬草書『神農本草經』の中で、菊は、邪気を払い、血氣を盛んにし身を軽く老いに耐え不老長寿の効あるとされる

※重陽の節供

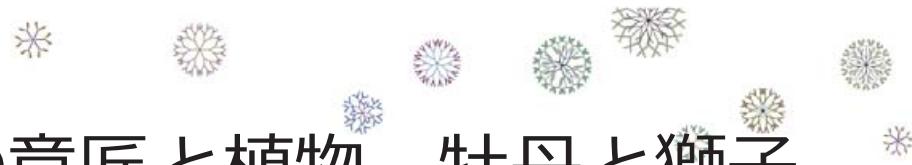
九月九日は陽数（奇数）の極である九が重なるめでたい日



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－牡丹と獅子



- 小袖の場合、龍や虎といった厳めしい面持ちの動物は敬遠されがち。獅子の場合も、扇を二枚合わせた扇獅子で代用させてい



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－牡丹と獅子

『百花の王』牡丹、『百獸の王』獅子の組み合わせは、能の「石橋（しゃつきょう）」から

寂昭法師は、唐の国を巡礼中に清涼山にやってきて、谷に架かっている石橋を渡ろうとした。すると一人の童子が現れて「この橋は人間が架けたものではない。自然に出現したもので、幅も狭く苔むしている上に、谷の深さも千丈余りもあり、神仏の加護を得た者でなければ渡れるものでない」と引き止める。そして「橋の向こうは、文殊菩薩の浄土であり、しばらく待てばあらたかな奇事が起こるであろう」と述べて退く。やがて文殊菩薩のつかいである獅子が石橋の上に現れて、牡丹の花の咲き乱れる中で「千秋万歳も続くであろう」と寿いで舞い納める

なぜ、牡丹と獅子なのか？

百獸の王として君臨する獅子にはただ一つ恐れるものがあった。それは獅子の体の中の虫。その虫は我が身の体毛の中に寄生し、増殖し、やがて皮を破り肉に食らいつく害虫。しかし、この害虫は牡丹の花から滴り落ちる夜露にあたると死んでしまう。そのため獅子は夜になると牡丹の花の下で休む。

牡丹は獅子にとって安住できる場所

※ 文殊菩薩は知恵の仏で、獅子に乗った姿で表される

※ 獅子は仏の知恵の象徴



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－浜松



- 浜辺に見える箒と熊手、散り乱れた松葉、海上の帆舟は、謡曲『高砂』に由来するモチーフ



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－浜松



浜松と、そこに箒や熊手があったら、能の『高砂』（たかさご）に間違いなし！

播磨の高砂の浦に立ち寄った阿蘇神社の神主は、松の木陰を仲睦まじく掃き清める老夫婦に出会い、高砂の松の所在を尋ねる。「これが高砂の松だ」と答えた老人は、「自分は摂津の住吉に住み、妻は高砂の住人だ」と語り、離れて住んでも切っても切れな相生の松のいわれと夫婦愛の尊さを説く。そして「お先に住吉で待ちましょう」と、姿を消すふたり。浦人の舟で住吉へ着いた神主の前に、住吉明神が春景色をめでつつ現われ、天下泰平を祝して颯爽と舞う。

- 相生の松によせて夫婦愛と長寿を愛で、人世を言祝ぐ大変めでたい能
- 古くは『相生』『相生松』と呼ばれた

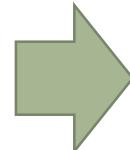




②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－葵



フタバアオイ



徳川葵紋



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－葵

花付き葵の丸紋



フタバアオイ

花立ち葵紋



タチアオイ

葵の丸紋



ミズアオイ



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－葵

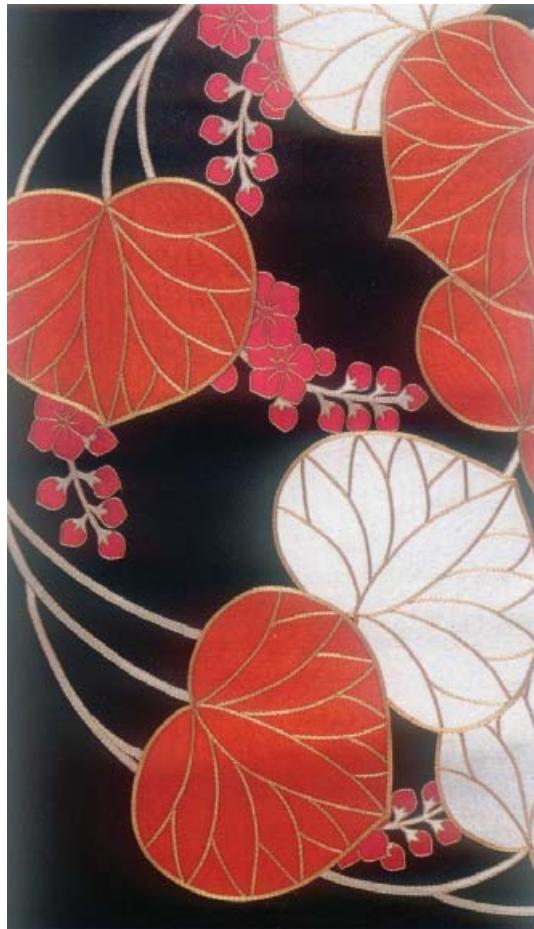


葵いろいろ

- 植物学上、単にアオイという固有の種はない。古くはフユアオイ、平安時代にはフタバアオイをいうなど、一般に何々アオイの総称と考えてよいが、最近はタチアオイを指すことが多い。タチアオイはハナアオイとも呼ばれる。室町時代に渡来。
- タチアオイ、フユアオイはアオイ科の一、二年草。フタバアオイはウマノスズグサ科カンアオイ属の多年草。
- ミズアオイ（ミズアオイ科） 万葉名：なぎ
ミズアオイは水に生え葉がアオイに似ていることによる呼び名。高さ30~70cm。葉はハート形で長さ5~20cm、滑らかで光沢がある。夏から秋にかけて茎頂に円錐花序を伸ばし、青紫色の花（花被辺は6個）をつける。



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－葵



かがやける小袖の美 切畠健より

- 水葵文は流水とともに描かれることが多い
- 左、図版の解説には「ここでは岩に二葉葵、沢瀉などを配して…」とあるように、研究者でも葵文を混同して使っていることが多い



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－葵



御簾に葵

- 御簾※とともに描かれる葵文はフタバアオイ
- 御簾に葵の文様は、京都の葵祭の情景を想起させる

※宮殿や社寺で用いる場合
のすだれの呼称



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－葵

葵祭（賀茂祭）



葵祭（賀茂祭）

- 京都市の賀茂神社、すなわち上賀茂神社と下鴨神社で行われる例祭。平安時代、「祭」といえは賀茂祭のこととした。
- フタバアオイは賀茂神社の神紋
- 昔は4月の中の酉の日（二回目の酉の日）、今は5月15日に行う。
- 当日の内裏宸殿の御簾をはじめ、牛車（御所車）、勅使、供奉者（ぐぶしゃ）の衣冠、牛馬にいたるまで、すべて葵の葉と桂で飾る。
- 葵と桂の葉をからませて作った葵祭の髪飾りを御葵桂（おんきつけい）ともいい、一緒に飾ることを諸飾（もろかざり）という
- 葵は女性で桂は男性をあらわしている
- 祭の行列は数百人で構成され盛大かつ華麗
- 賀茂祭は、当時の一大イベントであり、『源氏物語』のみならず文学作品にしばしば取り上げられた。



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－葵

『源氏物語』 第9帖「葵」

賀茂祭の日、供奉のため参列する源氏を見ようと身分を隠して見物していた六条御息所の一行は、同じくその当時懷妊して体調が悪く気晴らしに見物に来ていた源氏の正妻・葵の上の一行と、見物の場所をめぐっての車争いを起こす。六条御息所の牛車は破損、御息所は見物人であふれる一条大路で恥をかかされ、葵の上を深く恨んだ。その後葵の上は、六条御息所の生靈の仕業で病の床についてしまう。葵の上は難産のすえ男子（夕霧）を出産するが数日後亡くなつた…



- 葵の上と六條御息所の従者たちがおこした「車争い」は有名で、しばしば『源氏物語』の名場面として絵画にも描かれた。また、この『葵』を題材とした能や舞台が何度も上演されてきた。
- 葵（あふひ）→逢ふ日
葵祭は昔から好きな人に逢えるという迷信のある祭り



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－葵



源氏車に葵、藤の文様

葵－源氏の正妻葵上

藤－桐壺帝の中宮藤壺

源氏車と葵のモチーフは

賀茂祭の見物の祭に葵上の従者たちが六条御息所(ろくじょうみやすどころ)の車を押し退けるという「葵」の巻の車争いの象徴

※花と蕾をもつミズアオイの葵文を使用しており、デザイナーの葵文の混同がうかがえる



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－木賊に兎



木賊・砥草（トクサ）

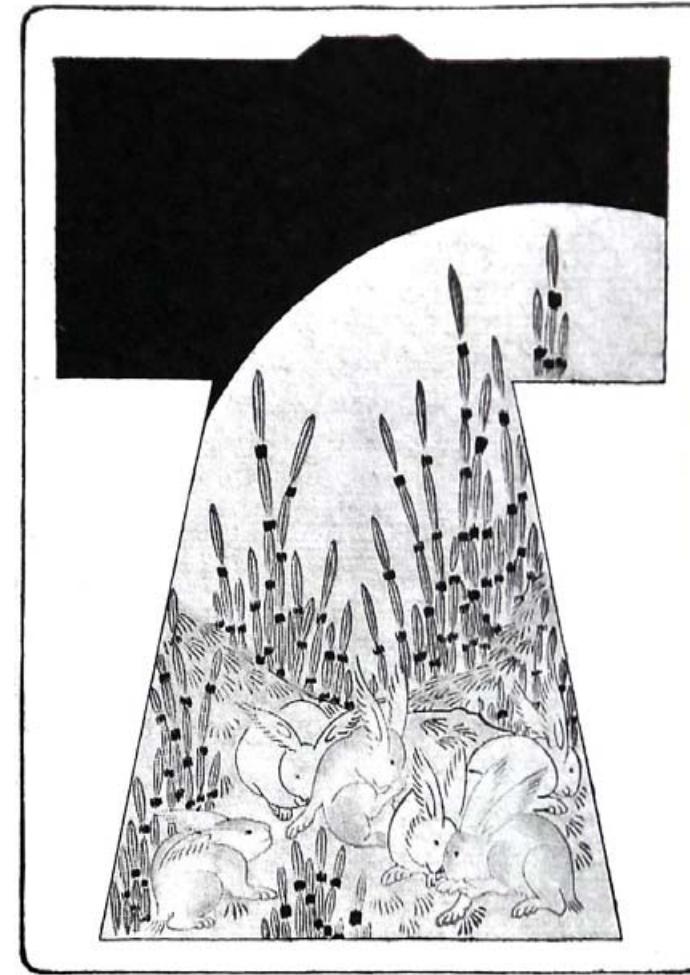
- 本州中部から北海道にかけての山間の湿地に自生
- 観賞用などの目的で栽培されることも多い
- 表皮細胞の細胞壁にプラントオパールと呼ばれるケイ酸が蓄積して硬化し、砥石に似て茎でものを研ぐことができることから、砥草と呼ばれる
- 古来、茎を煮て乾燥したものを研磨の用途に用いた
- 紙やすりが一般的な現代でも高級つげぐしの歯の加工、漆器の木地加工、木製品の仕上げ工程などに使用されている
- クラリネットなどの葦製リードを磨いて調整するのにもトクサが用いられる



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－木賊に兎



新撰御ひいなかた



小袖雛形「九重錦」



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－木賊に兎

木賊と兎の文様

- もととなった和歌

とくさかる そのはら山の 木の間より みがきいでぬる 秋の夜の月

源仲正 平安時代後期

- 謡曲『木賊』は、この和歌をもとにつくられた

幼いころに人に誘われて父と離れてしまった松若は、都の僧たちに伴われて父を尋ねる旅に出て、通りかかった信濃国園原山（長野県阿智村園原）で木賊を刈っている老人と出会う。老人は行方不明になったわが子の消息を知るために、旅人を伏屋の里の私宅に泊め、子供の好んでいた小歌曲舞を嘆きつつ舞いうたう。松若の探す父はこの老人であり、親子はようやく再会を果たすのであった。

- 『木賊』の詞章に「園原山の木賊は、名所といい、名草といい、歌人にもてはやされている」とあるように、園原山はその眺望の良さと木賊によってよく知られる名勝の地

- 謡曲中に引用されることにより、木賊を手にしてたたずむ寂しげな老人の周囲の、静かで美しい情景を想起される



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－木賊に兎

木賊と兎の文様



祇園祭「木賊山」

- 京都祇園会（祇園祭）の「木賊山」は、謡曲「木賊」の主題を作り山の趣向にしたものであった（桃山時代）
- 人形が左手に木賊、右手に鎌を持ち、山の松に掛けられた月を眺めて立つ
- 和歌→謡曲→祇園会の山、と、イメージの連鎖が生まれる
- 「御ひいなかた」が刊行された当時は「木賊刈り」の主題は広く認知されていたことがわかる
- 木賊刈りの文様は、直接的には京都祇園会の「木賊山」を取材したものと考えられる



②物語と謡曲・詩歌の意匠と植物－木賊に兎



狂言の肩衣

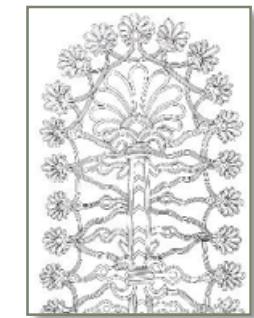
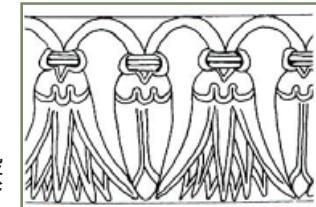
- 左図の肩衣の文様に見られる「木賊と兎」の組み合わせは絵画などにも見うけられ、奇抜な、おとぎ話の世界を表した意匠に思われるかもしれない。
- しかし、その背景に「和歌」「謡曲」「祇園祭の山」の存在を知ったものには、兎が満月を表すことをすぐさま理解し、園原山の美しい秋の夜空を想起する事が可能となる



唐草文様の旅



- 唐草は唐から渡來した文様という意味で唐草と呼ばれているが、その起源は古代エジプトのロータス(睡蓮)から出発し、古代オリエントのパルメットと融合しつつ形を変え、ギリシアにおいて連續する繰り返し文様に完成されたといわれている。
 - ① エジプトにおいてロータスは復活・再生を象徴する聖なる花で、工芸装飾や壁画などに欠かせない重要な花であった。
※エジプトに残るロータスの帯文様は花を横から見たものを並べ、その茎を繋いで反復させたもの。
 - ② また古代オリエントにおけるパルメットはオアシスに茂るなつめやし(パーム)を文様化したもので、繁栄や発展を表す植物であり、強烈な太陽光から陰を作つて人々を守ってくれる救済のシンボルでもあった。オリエント地方ではこのパルメットの繋ぎ文様が重要な装飾文様であった。
※アッシリアではパルメットを繋いだ形の木を「生命の樹」として神聖視
 - ③ この二つの文様が交ざり合い、古代ギリシアで優美な曲線を持ったパルメット唐草に発展して、壺絵などの装飾で頻繁に使われるようになった。
- こうして完成されたギリシアの唐草は、その後マケドニアのアレクサンダー大王の東征によってギリシア文化がインドに及んだように東方へと流れていった。

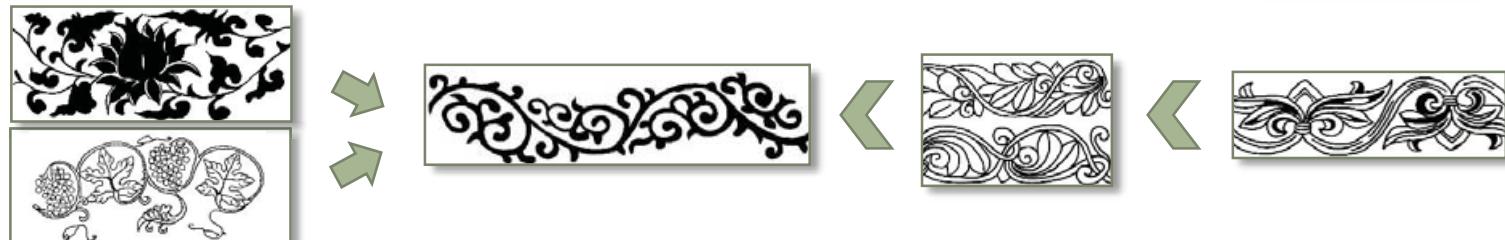
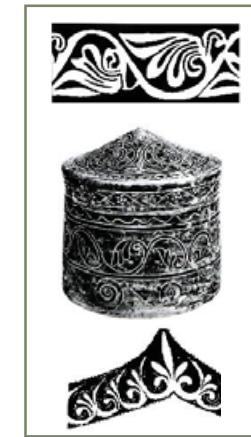




唐草文様の旅



- ④ その間、インドでも蓮をモチーフにした唐草文様が登場。仏教美術の至る所に取り込まれた。※インドで蓮は仏教の象徴的な花として神聖視
- ⑤ 中央アジアのクチャや樓蘭などには、北ルートでパルメット唐草が伝わる。※仏教とはあまり関わりを持たず、装飾品に多くあらわれる。
- 樓蘭から敦煌辺りはインド経由の南ルートとの合流点で、ここでパルメット唐草は仏教美術に徐々に取り入れられつつ東へ伝わっていく。
- ⑥ こうしてパルメット唐草は、中国での仏教の装飾文様のひとつとして、柘榴や葡萄など他の唐草文様と複雑に交ざり合いながら形成されていった。以後、中国の唐草文様は様々な植物との連携によってつくり出されてゆく。

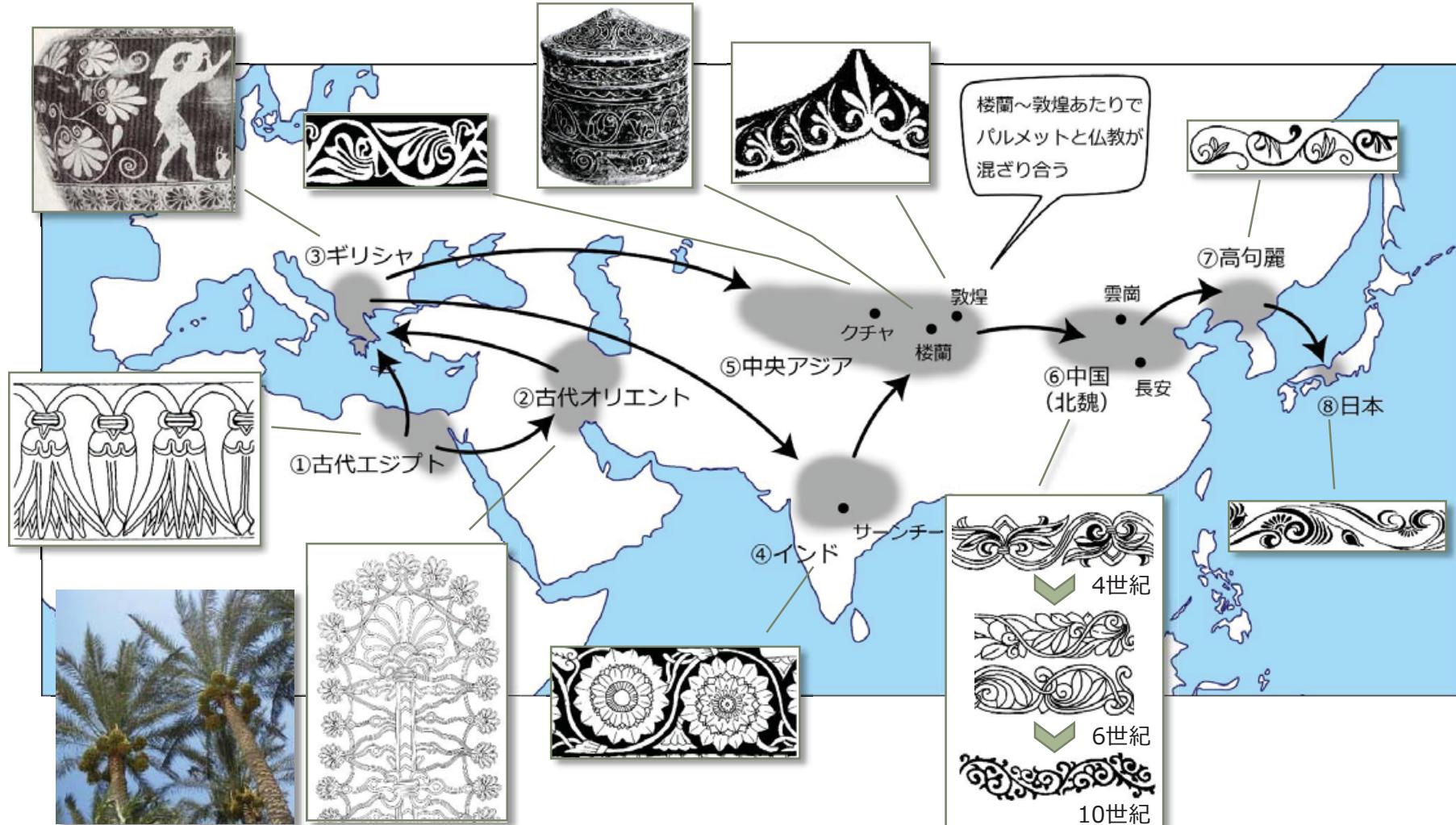


- ⑦ 仏教装飾として日本に伝來したパルメット唐草は、日本では「忍冬文」となる。
ゞ やがて、桃山、江戸時代には本来蔓のないはずの桐、松、丁字、牡丹など好み
⑧ の植物をも取り込んで様々なバリエーションを持つようになり、日本で最もな
じみのある文様になった。





唐草文様の旅





唐草文様の旅－様々な唐草



鉄線唐草



牡丹唐草



四菱唐草



若松唐草



丁字唐草



梅唐草



花唐草



蓮唐草



和服文様における植物の話～まとめ



- 江戸時代の小袖に現れる文様には、和歌や物語などの古典文学や謡曲や故事・ことわざなどに典拠を持つものがある。無論、すべての小袖がこの種の趣向をもっていたわけではないが、このような文様が好まれて次々に考案されたことは確かである。
- これらの文様の意味を読み解いてみると、そこには当時の人々がもっていた趣味や教養や関心事や生活感覚、あるいは行事や芸能など、幅広い範囲に行きわたっていた好尚が反映していることがわかる。そして、それらを理解することは、その文様を考案した人と、それを着る人、見る人の心に思いを馳せることに他ならない。日本の衣裳と文様は、含蓄のある美的な創造物である。
- このような小袖、特に女性の装いにおいて、その文様の主役となってきたのは、明らかに「植物」であった。それらの古典文様として和様化した植物が、ある程度、限定されたものになるのは、やはり、その文様の典拠によるものであろう。
- 古典文学や芸能の中で、植物が重要な役割を担うのは、人間が、ときに自身を植物に投影し、それに感情移入するからではないか。
- 万葉集には、よく「かざし」という言葉が登場する。「かざし」の語源は「かざす」、すなわち「髪に挿す」に由来する。そして「かざす」は「かざる」と姉妹関係にあるという。花や枝を髪に挿し、その華やかさと生命力を体内に取り込もうとする。日本人の装飾主義の、心の原点がここにあるように思われる。
- くり返し意匠として使われ、今日に残る植物の古典文様は単純で美しい。自分たちはそれを継承するにとどまらず、新たな文様を生みだしていく気概をもたないと、きものの未来に明るい兆しは見えない。





参考文献



- 北村哲郎染織シリーズ1／2 日本の文様 源流社
- 日本の文様12 桐 小学館
- 日本・中国の文様事典 視覚デザイン研究所 編
- 文様の事典 岡登貞治 編 東京堂出版
- 江戸モード大図鑑 =小袖文様にみる美の系譜= 編集 国立歴史民族博物館
- かがやける小袖の美 田畠家コレクション 朝日新聞社
- 能にアクセス 井上由理子 淡交社
- 能を彩る文様の世界 野村四郎・北村哲郎 共著 檜書店
- 日本ビジュアル生活史 江戸のきものと衣生活 丸山伸彦 編著
- 新集 家紋大全 本田總一郎・監修 梧桐書院
- 万葉植物事典 万葉植物を読む 山田卓三・中嶋信太郎 著 北隆館
- 万葉花譜 春・夏／秋・冬 松田修 国際情報社
- 花の万葉集 監修=犬養孝 写真・文=大貫茂 グラフィック社
- 万葉集（一～五）中西進 講談社文庫



万葉植物クイズ①

◆ 万葉集に登場する花 の中で、たくさん詠まれた植物ベスト15は？

	花		植物全体	
	万葉花譜-松田修より		花の万葉集-大貫茂より	
1	はぎ	141	はぎ	142
2	うめ	118	たへ・たく・ゆふ（コウゾ）	138
3	たちばな	68	うめ	119
4	すすき・をばな	46	ぬばたま	79
5	さくら	40	まつ	77
6	くれなゐ（ベニバナ）	29	も（藻類）	74
7	ふぢ（フジ）	27	たちばな	69
8	なでしこ	26	いね（田・穂も含む）	57
9	うのはな（ウツギ）	24	あし	49
10	くず	18	すげ・すが	49
11	やまぶき	17	さくら	46
12	をみなへし（オミナエシ）	14	すすき・をばな	44
13	あしひ（アセビ）	10	やなぎ	36
14	つつじ	10	あづさ（ミズメ）	33
15	つばき	9	くれなゐ（ベニバナ）	29

万葉植物クイズ②

◆ 紹介した植物と詠まれた歌

植物名	歌	現代語訳
うめ	わが園に梅の花散るひさかたの天より 雪の流れ来るかも 大伴旅人（巻5-822）	わが家の庭の梅が花びらを散らしている。まるで空から雪が流れてくるようにうつくしい
さきくさ ミツマタ	春さればまず三枝の幸くあれば後にも 逢むな恋ひそ吾妹 柿本人麻呂歌集（巻10-1895）	春になるとまず咲くさきくさの、その名前のように幸く無事であったなら、またいつか会えるでしょう。いとしい人よ、あまり恋に心を苦しめないでく
かたかご カタクリ	物部の八十少女らが汲みまがふ寺井の 上の堅香子の花 大伴家持（巻19-4143）	若い娘たちが集まって賑やかに水を汲んでいる。その寺井のほとりで咲く可愛らしいかたかごの花よ
さくら（山桜）	見渡せば春日の野辺に霞立ち咲き匂へ るは桜花かも 作者不詳（巻10-1872）	見渡してみれば、春日の野あたりに霞がたって、咲き染めているのは桜の花だろうか
はは アミガサユリ	時時の花は咲けども何すれぞ母とふ花 の咲き出来ずけむ 防人山名郡の丈部真麿（巻20-4323）	四季折々の花は咲くけれども、どうして母という花は咲き出さないのでしょうか
つばき	河の上のつらつら椿つらつらに見れど も飽かず巨勢の春野は 春日老（巻-56）	川のほとりにつらなって咲いている椿は、つらつらとしていくら見ても飽きることはない。本当に素晴らしい眺めだ、巨勢の春野は
ぬばたま ヒオウギ	居明かして君をば待たむぬばたまのわ が黒髪に霜は降るとも 磐姫の皇后（巻2-89）	このまま朝まで寝ないあなたを待っていましょう。たとえ私の黒髪に霜が降ろうとも
あかね・ むらさき	あかねさす紫野行き標野行き野守は 見ずや君が袖振る 額田王（巻1-20）	紫草の生えた野を、あっちに行ったりこっちに行ったりしながらそんなことをなさって。野の番人に見られてしまうではないですか、あなたが私に袖を振
やまぢさ イワタバコ	山萬苅の白露しげみうらぶるる心も深 くわが恋止まず 柿本人麿歌集（巻11-2469）	やまぢさが白露の重みでうなだれているよう、わたしの心も深くうなだれています。あなたを恋する思いは止むことがないですから
はぎ	秋の野に咲ける秋萩秋風になびける上 に秋の露置けり 大伴家持（巻8-1597）	秋の野に咲いている萩の花が秋風になびいて揺れている。その上には秋の露が宿ってキラキラ輝いている
思ひ草 ナンバンギセル	道の辺の尾花が下の思ひ草今さらさら に何をか思はむ 作者不詳（巻10-2270）	道端の尾花の根もとで、頭をたれて物思いでもしているような思ひ草のように、今さら改めて何を思い悩んだりしましょう
たまばはき（玉箒） コウヤボウキ	初春の初子の今日の玉ばはき手に取る からにゆらく玉の緒 大伴家持（巻20-4493）	新年の初子をお祝いするためにいただいた玉箒よ、手に取ってみるや、箒の先に付けられたたくさん飾りの玉の緒がゆらゆら揺れて音をたてます。なんと美しいことか
ほよ ヤドリギ	あしひきの山の木末のほよ取りてかざ しつらくは千年寿くとぞ 大伴家持（巻18-4136）	山の木の梢に生えているほよを取って、髪飾りにして挿したのは、千年の長寿を祈ってのことです